

とらうべ

縄文の人に学ぶ

木村 守男

青森県知事

国際時代の中で次世代に思いをいたすとき、国民一人ひとりが、今何が大事なのか、立ち止まって足もとを見つめ、日本の将来のために考えなければならないことでしょう。子供にとって、健やかに、個性豊かに育まれる環境が大切だと思います。子供たちが、他人の悲しみや苦しみに涙し、喜びを友と分かち合える子であってほしい、自然の美しさや不思議に気付く感性に優れた子であってほしい、豊かな創造性と個性をもち、未来に向かって大きな夢を抱く逞しい子供たちを育むこと、これが全ての人の願いだと思います。

そのために何が大事でしょうか。それは、少子社会脱却だと思います。

児童心理からすれば、幼児、児童の頃はできるだけ兄弟3人以上が望ましいと言われています。

1人っ子の場合は、家庭の中で、喧嘩の相手もいない、遊ぶ相手もいない。家庭の中で協調性や逞しさが培われるのが薄いと言われています。2人っ子の場合は、遊ぶことができても、何かでぶつかり合ったりしたとき、心解け合うのに時間がかかると言われています。3人以上の兄弟は、ぶつかり合っても、すぐに解け合うことが多いと言われています。

なぜ、3人以上なのでしょう。我が子をかawaiiと思う親は、自分の子を抱いてあげるでしょう。丈夫な親でも散歩や買い物に行ったとき、2人は抱くことはできても、3人を一度に抱いて歩くことはできません。抱いてもらえない子は、抱いて欲しいと思いながらも自立心が育まれ、「危ない」というとっさの母の叫びに、命の危険への恐怖や、その場を過ぎて落ち着いたとき、子供心に母の深く強い愛を感じて育つと言われます。

登下校時や学校においてもまた休日でも、子供が群れなして遊ぶ環境

が大事だと言われています。

各家庭が、個人的な環境や境遇の中で、お子さんを産み、育むことは大変なことですが、戦後、食料不足や経済・社会秩序混乱の厳しい環境の中にあっても、当時の親たちは、自分の幸せを求める前に、子の将来の幸せのため、食べ物さえ我慢して子に与えたものでした。そしてまさに、子供の健やかな成長に全ての願いをかけ、地域社会全体もそういう時期がありました。そして努力した母親たちは、経済的に苦しい中、子供たちが立派に成長しても、求めることはしませんでした。そこには、無償の母の愛がありました。

ところで、私たちの青森に5500年前の三内丸山遺跡が発掘され、それまでの日本の縄文の歴史を塗り替えました。そのシンボリックな存在である六本掘って建て柱は、屋根の有無について学説が分かれていましたが、このことを素直に受け止め、両説が一致したところまでを再現した姿となっています。これは、今後の学問の発展に期待し、幻想的な姿に、現代に生きる者として、古(いにしえ)の時代に思いするロマンを持ち続けたいと思っのことです。

その縄文の集落の住居跡と思われる場所の近くからは、赤ちゃんの遺骨が発掘され、大人の墓は離れたところからまもって発掘されています。

深い悲しみと、わが子を思う不憫の情で心を覆われた縄文の母親たちの、いつまでも身近に置いておきたいという気持ちの表れではなかったのでしょうか。

子供を産み育むために、いろいろと助言しお手伝いしてくれる助産婦さんの仕事は、核家族が多くなっている今の時代には大事なことだと思います。

それにもまして、親となる人の自覚、責任が、今、強く求められている気がします。